季報 Quarterly Report

二松学舎大学附属図書館

P2　館長就任にあたって　押野　洋

P3　夏休みの思い出　田場　弓子

P4　私の夏休み　ひとつの旅の記憶から　足立　元

P5　特別展「創立者　三島中洲没後 100 年」展を開催　／
山田方谷記念館が岡山県高梁市に開館

P6　ラーニング・コモンズはアクティブな学びの場

P7　楽しく蔵書検索　／　新着図書　おススメの１冊

P8　本学教職員著書紹介

No.105

2019（令和元）年７月

館長就任にあたって

附属図書館長
国際政治経済学部国際政治経済学科　教授　押野　洋

この４月に附属図書館長を拝命いたしました国際政治経済学部の押野です。前館長の土屋茂先生が「季報 100・101・103 号」で「図書館の現状と課題」について簡潔にまとめておられます。土屋先生もご指摘されているように、本学の図書館が抱えている最大の問題は収納スペースの不足です（もっともこれは九段という一等地に立つ大学全体の悩みで不足しているのは図書館の収納スペースだけではありません）。この課題を少しでも改善すべく、昨年 10 月に柏キャンパス５号館１階（元の学食）に「二松学舎大学附属図書館資料センター」が設置されました。しかしこの収納スペースも遠からず飽和状態になるのは明らかであり、肝心の九段図書館のスペースが拡張されたわけでもありませんので直接的な問題解決とはなりません。そこで土屋先生は長期的な解決策として、九段キャンパスに図書館棟の建設を、そして暫定的な策として柏キャンパスの有効な利用を挙げられています。この柏図書館の有効活用と九段図書館の利用環境のさらなる改善、この二つが当面の課題であろうと考えています。

図書館長としては、特に普段あまり図書館に来ることのない学生にもっと図書館を利用して頂きたいと思っています。図書館は「知の宝庫」です。入口の右手の雑誌コーナーの政治経済系に、ドイツの雑誌「Der Spiegel（デァ　シュピーゲル）」が置いてあります。ドイツ語が分からなくても構いませんので、ぜひ一度手に取って表紙の左の部分を見てください。世界の 15 の国・地域での販売価格が小さく書かれています。これはどういう事でしょうか？
それはこの雑誌は世界中で読まれているということです。言い換えれば、書き手は世界中の読み手を意識して記事を書いているということです。世界中のメディアで引用される高級誌シュピーゲルは毎週月曜日発行ですが、政治家は戦々恐々としてその発売を待っていると言われています。これまで幾人もの政治家がこの雑誌の切れ味鋭い暴露記事で政治生命を絶たれてきたからです。日本の雑誌の価格表示は日本語だけです。これは至極当然のことで誰も不思議に思いません。が、隣にシュピーゲルを置いてみると、日本の雑誌に対する見方が少し変わってゆくような気がしませんか。ドイツの雑誌を手にするだけでもこのような考えをめぐらすことができるのです。この一例でも分かるように、図書館は皆さんの知識・考え方を広めたり深めたりするような切っ掛けが無数に潜んでいる空間です。時間があれば（時間つぶしでも構いませんので）、大いに活用してください。

図書館は本の貸し出しだけを行っているのではありません。皆さんがレポートや論文（卒論）を書く際の資料検索のお手伝いも行っています。さらに、多種多様な CD・DVD の視聴・貸出も行っています（本学出身の実力派中堅真打の三遊亭兼好さんの落語の DVD ももちろんあります）。九段・柏図書館の展示コーナーでの企画展、「レポート・論文の書き方」講座、「データベース活用講座」、「選書ツアー＆ワールド・アンティーク・ブックプラザ見学会」、７月の創縁祭では「知的書評合戦ビブリオバトル」の開催、基礎ゼミを通しての図書館・ラーニングコモンズ案内等を行っています。さらに本学は横溝正史関連資料を始めとして貴重な資料を数多く所蔵しています。このような本学所蔵資料の展示（今年度は６つの企画展を予定）、そして柏図書館では「水木かおる記念文庫」「水木かおるコーナー」の展示を行っています。本学が所蔵している多数の貴重な資料や図書館が行っている様々な企画・講座について、学生のみならず一般の方々に対してもさらに周知させる必要性があると感じています。

最後になりましたが、図書館に関するご意見やご要望などお知らせ頂ければ幸いです。図書館の職員や丸善雄松堂スタッフの方々とともに、少しでも利用しやすい図書館にしてゆきたいと考えています。

夏休みの思い出

国際政治経済学部国際政治経済学科　専任講師　田場　弓子

大学では自分の興味のある事柄についておそらくほとんどすべて学ぶことができるはずである。私は経済学を学ぶために大学へ入学したが、生物学や建築学など理系科目にも興味を持っていた。専攻する科目以外の学問の一端に触れられる機会は、一般的には１年、もしくは２年次までに履修する教養科目にある。

私はこの期間に工学部が提供する建築学の講義を履修した。もう大部分を忘れてしまったが、講義内容は、世界の建築物についての歴史的背景と各地域の天然資源や気候、時代に即した建築にはどのような意味があるのかなどの 解説であったと記憶している。

この講義の特徴は、実際に建造物を見に行く機会があることだった。当時の私は今より行動力があったので、そのツアーに参加することにした。夏休み期間中に希望する学生とともに海外に歴史建造物を見に行くのだが、その年は東南アジアを廻ることになっていた。２週間程かけて、マレー半島をタイから下り、マレーシア、シンガポール、そして最後に台湾を訪れて帰国した。

出発前の準備では、数人のグループに分かれて各国の建築物などを調べ観光ルートを作成し、ツーリストに頼んで詳細な日程を組んでもらった。私はマレーシアの担当だった。数日間、グループのみんなでマレーシアの観光名所や史跡、習慣、歴史などを調べてレポートに纏める作業をした。遅くまで大学の図書館で調べ物をして、ファミレスに行っておしゃべりしながらレポートを作成したことも懐かしい思い出だ。

旅先ではそれ程いいホテルに泊まったわけでもなく、食事もおしゃれなレストランに行くことなどなかった。現地の人たちが行く屋台のようなところで食事をしたり、シンガポール国立大学の学食にも行った。今なら不便なことだし、多分選ばないお店だったと思うが嫌な思い出は一つもない。当時はいろいろなものを受け入れられたんだと思う。しかし、紀行文に付き物の旅先での人との出会いみたいなものは私にはない。人見知りの傾向があることと、疑り深い性格が災いして、会話は何とかできても現地の人と連絡先を交換するなんていうことは無理だった。それができたらもっと楽しかったのかもしれない。

強く印象に残っているのは各都市の明るさである。マレー半島は綺麗なグラデーションを描くようにタイからシンガポールへと都市が明るく輝いていく。（と、当時は思った。今は変わっているかもしれない。）この旅行から帰国後しばらくして読んだ『深夜特急２ ―マレー半島・シンガポール―』で著者の沢木耕太郎も語っているようにタイのバンコクは本当に街全体が暗かったし、人々も荒んでいるように感じられた。

帰国後、なぜタイに思いの外悪い印象を持ったのかが心に残っていて、自分なりに勉強した。主な原因は、1997 年の金融危機であることがわかった。しかし、金融危機以前は主に輸出を中心とした経済政策を重視し、経済発展は順調だったことを知った。そこで気がついたことは、ある国の経済発展には政府の政策が大きな役割を果たしていることと貿易が重要であるということだった。例えば、歴史を遡れば、タイはマレー半島で唯一植民地にならなかった国である。西欧諸国の植民地化を回避できたのは、高度な戦略的外交政策と輸出主導型政策の結果であった。また、シンガポールはポルトガルやイギリスの植民地になったものの独立後、国家主導型の貿易政策（中継貿易）によって、高い成長率を達成した。同様に、マレーシアも強力な国家主導型の政策を実施していた。

私はこのような政府主導型貿易政策にずっと興味を持ち続け、それから３年後、東南アジアをモデルとした貿易・産業政策についての卒業論文を作成した。その後、大学院に進学し、紆余曲折様々な問題を考える機会があったが、現在まで続いている研究は、国際貿易と政府の政策に関するものである。

この原稿を書きながら、今同じ場所を再度訪れたらどんなことを考えるのかなと思った。

私の夏休み　ひとつの旅の記憶から

文学部国文学科　専任講師　足立　元

2010年にポーランドのクラクフに学会で行く機会があり、それから二週間ほどを遅い夏休みとして、電車で東欧を点々と旅していた。以下は孤独だったけれども自由だったときの旅の記憶である。

東欧の国々では、夏の終わりにはもう常に肌寒く、ほとんど陰鬱な曇り空に覆われている。だが、しばしば驚くほど輝きに満ちた街並みや風景を見ることが出来る。雲が晴れたときには、灰色のヴェールが視界から剥がれて、恩寵のように輝いた光景が現れるのだ。それでもやはり、この曇り空の下では、あらゆるものがどこか重い意味を持って見えるだろう。ここでは至るところに、耐えがたい敗北と服従の歴史の痕跡が存在しているせいかもしれない。

ポーランドの詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカには、次のような言葉がある。「この世には戦場のほかの場所はないのかもしれない／戦場にはまだ記憶されているのも／もう忘れ去られているのもあるけれど」（沼野充義訳「現実が要求する」『終わりと始まり』未知谷、2002年）。

東欧の中でも、いや世界中でも、ポーランドの国立オシフィエンチム博物館こそは、最も重い意味を持つ場所の一つであろう。ここは、第二次世界大戦下に、ドイツ軍がユダヤ人を送り込んだアウシュヴィッツ強制収容所として知られる。

このミュージアムでは、特別に訓練されたガイドたちが、ナチスの非道を声高に責めるのではなく、たとえばベッドでどうやって囚人たちが寝ていたのかを細かく語り、当時の社会背景までを冷静に解説してくれる。広大な敷地を歩き回るだけでも半日以上かかって、足が相当に疲れる。その状況でずっとガイドの落ち着いた声を聞き続けていると、声が、モノや風景よりもずっと強力に、直接に精神に介入してくる。ここでは歩みとともに、生者の声をつうじて、死者たちの沈痛が、頭の中に何度も刻まれるのだ。

アウシュヴィッツのガス室跡

アウシュヴィッツの後、ワルシャワ、ポズナン、ドイツのベルリンを経て、チェコのプラハへ向かった。チェコ出身の小説家ミラン・クンデラが著した小説の舞台を、いつかこの目で見たいと願っていたからだ。

クンデラは、1968年の「プラハの春」の後、この街がどのように変わってしまったかを次のように描いている。「これはどんな歴史家によっても書きとめられない事実だろうが、ロシア侵攻のあとの数年間は埋葬の時代だった。死亡がこれほどの頻度に達したことは、かつてなかったのである。（中略）死は直接迫害されていない者たちをも襲った。国を捉えた絶望が魂にひたひたと浸透し、人びとの体を捉え、彼らを打ちのめしたのだった」（西永良成訳『存在の耐えられない軽さ』河出書房新社、2008年）

プラハの、銀座通りに相当するような洒落た街路の奥に、共産主義博物館がある。展示品の中には、当時の貧しい生活水準を示す品々、盗聴器や尋問の道具、そして民衆の暴動を記録した写真や映像が含まれる。中でも、「ビロード革命」の映像は印象的であった。クンデラは「プラハの春」の実態が市民のフィルムカメラによって記録されたことを特筆していたが、「ビロード革命」は市民のビデオカメラによっても記録されていたのである。その中には、デモ隊の中に私服の秘密警察が紛れ込み、市民を暴行している光景までも、ありありと写されていた。

プラハの共産主義博物館、尋問場所の再現展示

今日のプラハの街を歩いても、かつてありふれていた秘密警察の脅威は、もはやどこにも感じられない。ここもまた、「忘れ去られた戦場」のひとつで、今は普通の安全な観光地だ。しかし、この街で既に当たり前となっている自由は、かつてこの街で盗撮・盗聴され、脅迫され拷問されて死んでいった人びとが、未来のうちに獲得することを切望していたものである。だからこう考えてみた。自分は現在、地下に眠る彼らの理想の未来を旅しているのだと。そうして見ると、陰鬱な曇り空は晴れなくても、微細で軽やかな祝福の輝きが、実はこの街の至るところに満ちているような気がしてきた。

（本稿は、『美術運動』2011年3月号に掲載した文章を短くしたものである。）

プラハの街並み、カレル橋からの眺め

特別展　「創立者　三島中洲没後１００年」展を開催

2019（令和元）年５月 12 日に、本学の創立者である三島中洲が逝去してから 100 年を迎えるにあたり、４月 22 日（月）～６月８日（土）までの期間、九段１号館地下３階の大学資料展示室に於いて、特別展「創立者 三島中洲没後 100 年」展を開催した。

中洲は、1831 年１月 22 日（天保元年 12 月９日）に備中窪屋郡中島村（現・岡山県倉敷市）に出生し、14 歳で山田方谷の門に入り、23 歳からの４年間伊勢津藩の斎藤拙堂のもとで見識を深め、さらに昌平黌において佐藤一斎に学んだ。28 歳の時、山田方谷の勧めにより備中松山藩に仕え、老中であった藩主板倉勝静を師の山田方谷とともに助け、激動の幕末を生き抜いた。明治維新後、43 歳の時に新政府の命により新治裁判所長、その後大審院（現在の最高裁判所）判事を務めた。1877（明治 10）年、48 歳の中洲は、自邸のあった現在の千代田区三番町の地に漢学塾二松学舎を創立し、夏目漱石・嘉納治五郎・平塚らいてうなど多くの名士を輩出した。東京高等師範学校教授、東京大学教授、東宮（のちの大正天皇）職御用掛・侍講、宮中顧問官などを歴任し、90 歳で天寿を全うした。

特別展は、中洲の生涯を４期［Ⅰ期 修学（１歳～ 31 歳）、Ⅱ期 幕末維新期の活躍（32 歳～ 42 歳）、Ⅲ期 明治新政府への出仕（43 歳～ 66 歳）、Ⅳ期 一世の師表（67 歳～ 90 歳）］に分け、日記・文稿、漢籍、書幅等の遺品 48 点を展示した。展示品の主なものは、Ⅰ期－備中松山城下の山田方谷の塾での修学を示す文稿『（弘化中）文稿』、伊勢遊学中の中洲が友人と月ヶ瀬・奈良を遊歴した時の紀行文『探梅日記』、Ⅱ期－ 1861（文久元）年から 1872（明治 5）年に至るまでの詩稿を収めた『虎渓存稿』、中洲の清国情報や国際情報認識の一端がうかがえる『瓊浦筆談』、Ⅲ期－中洲が司法省の会議に出席してフランスの法学者ボアソナードの講義をまとめた聴講ノート『仏蘭西民法講義聴書』、落合直文・国分三亥・能勢萬・荘田要一郎・藤井米一郎ら二松学舎在学生による詩文結社「風水文社」の集合写真、Ⅳ期－中洲東宮侍講時代の写真、入江雨亭・安藤翠洲と共に大中寺（静岡県沼津市）を訪れた際に詠んだ漢詩の書幅等である。

会期中、自校教育の一環として本学の大学・高等学校教員引率のもと多数の学生・生徒の来場があった。

山田方谷記念館が岡山県高梁市に開館

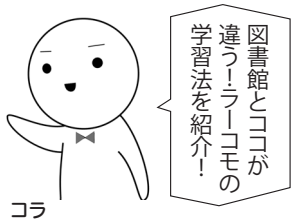
2019（平成 31）年２月 24 日（日）、幕末に備中松山（現・岡山県高梁市）藩主板倉勝静を助け、藩の財政を立て直し、多くの有能な人材を育てた山田方谷の記念館が高梁市に開設された。昨年７月の西日本豪雨により高梁市は被災し、復興最中の山田方谷記念館の開館は、まさに光明といえる。その初代館長には二松学舎大学の卒業生の山田敦氏が就任された。山田敦氏は、山田方谷の玄孫、二松学舎専門学校初代校長の山田準の孫にあたる。

開館に際し、式典が催され、近藤隆則高梁市長の挨拶、玄孫の山田安之（学校法人二松学舎元理事長）高梁市市政アドバイザー等による来賓挨拶、テープカット後、記念館が公開された。展示室は山田方谷の事績を「儒学者への道」「備中松山藩の藩政改革」「教育への情熱」の３つのテーマに分けて紹介されていた。山田方谷の愛弟子の一人である本学創立者・三島中洲の東宮侍講時代の写真（本学提供）が展示された。会場を備中高梁駅に直結の高梁市図書館に移し、岡山県立博物館総括参事の竹原伸之氏による「山田方谷の藩政改革～山田家文書を中心に～」と題する講演会があり、講演終了後、新たに駅前に建立された山田方谷像の除幕式が執り行われ、式典は終了した。本学から志村孝総務・人事部長と髙柳幸雄図書館事務部長が参列した。

【山田方谷記念館前にてテープカット】

ラーニング・コモンズは

アクティブな学びの場



1F Step1：自学自習

資料調べ＆PC 作業もサクサクはかどる！

①テーマ選定

②資料収集
（図書館：B1&B２階）

③Web 検索＆
AV 資料閲覧

④レポート作成

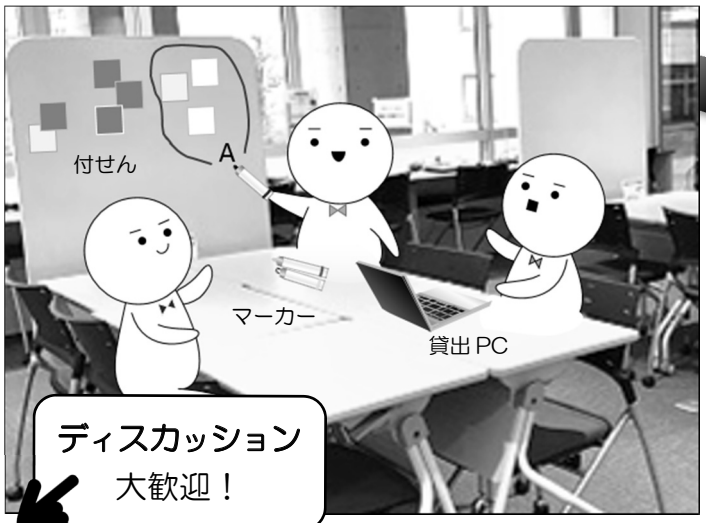
⑤データ保存
（USB メモリ使用可）

⑥印刷

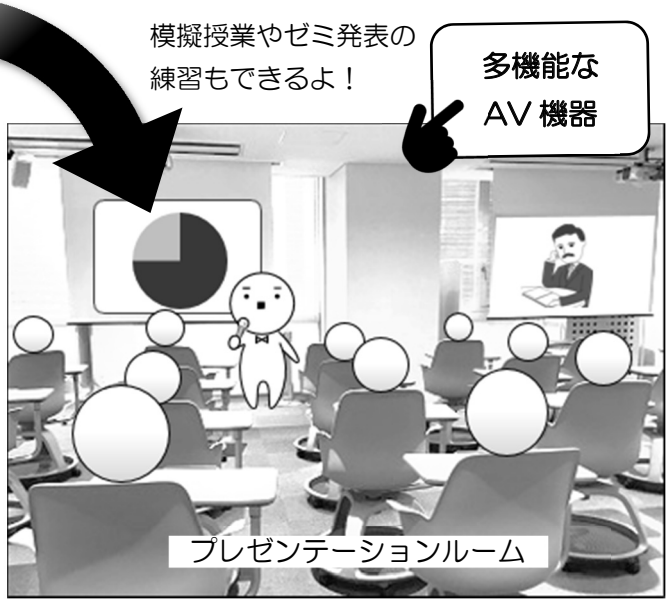
※A4 モノクロ片面印刷・１回 20 枚まで

Step2：グループワーク ＆ 発表 2F

それぞれの成果を持ち寄って活発に話し合おう！



模擬授業やゼミ発表の
練習もできるよ！



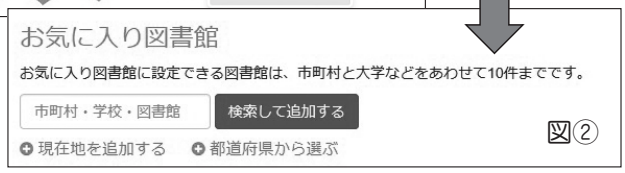
●貸出備品・プレゼンルームの
利用申込は１Ｆカウンターへ

楽しく蔵書検索

前号（No.104）では、図書館 HP から直接調べられる「CiNii」や「国立国会図書館」の蔵書検索方法を紹介しましたが、他にも「カーリル」という便利なサイトがあります。「カーリル」とは、「本を発見し出会う楽しみ」を実現するためのサービスとして設計され、「全国の図書館の蔵書情報と貸し出し状況を簡単に検索できるサービス」で、現在国立国会図書館をはじめ 7,000 以上の公共図書館や大学図書館に対応しています。したがって本学や自宅近くの公共・大学図書館の蔵書情報・貸出状況を一度の検索で調べることができるのです。

また、トップページ右上の設定から、「お気に入り図書館」をクリック（図①）して、図②の画面で自分がよく使う図書館を検索して、「お気に入りの図書館」に追加できます。これを繰り返すと自分オリジナルの設定が出来上がります。

図①



図②

設定後に、前号で例に挙げた『中級中国語読みとく文法』を検索してみると、千代田区立図書館にあることがわかります（図③）。さらに捜索範囲を広げて探したい場合には、「もっと探す」という区分があります（図④）。そこには「東京都の図書館をまとめて探す」という項目もあり、都内の所蔵館と貸出状況をまとめて検索することができます。

一度サイト（https://calil.jp/）を閲覧してみてはいかがでしょうか。

図③

図④

新着図書　おススメの１冊

榎原雅治著　『中世の東海道をゆく　京から鎌倉へ、旅路の風景』（読みなおす日本史）
吉川弘文館　2019 年２月［請求記号］291.5-EM

「東海道」と聞くと、歌川広重の浮世絵「東海道五十三次」にも描かれるお江戸日本橋を起点に京都三条大橋までの街道を最初に思い浮かべる人も少なくないでしょう。私もその一人ですが、「中世の東海道」はそれとはルートが違い、そもそも東海道が東西交通の大動脈であったのは江戸時代より随分前からであり、また、現在の東海道新幹線は実は中世の東海道と並行して走っている部分が長いとか。

本書では、平安時代末から江戸時代初めまでの東海道を、中世の旅人“飛鳥井雅有”の旅日記という文学資料を基に地図を描いています。千年前、五百年前の人びとが東海道の旅を通してどのように自然を感じ、命を感じ、人生を感じていたのかについて、歴史学、文学、地理学、地質学的視点を織り交ぜて分析・考察しています。研究者的視点に立ちつつ、わかり易い口調と構成で書かれているため、気軽に読めてかつ専門的な情報も沢山詰まっているお得感のある内容です。

本学教職員著書紹介

『実践ハングル：これなら聞ける話せる！（音声DL BOOK）』

塩田今日子 著
（NHK出版　2018年11月15日発行）
A5 版　127 頁・1,500 円＋税
ISBN：978-4-14-035160-4

本書は、日本を訪れる韓国人に積極的に話しかけ、手助けをしたり案内をしたい人のための会話集です。2016 年 4 月から 2017 年 3 月まで NHK「レベルアップハングル講座」に連載した「朔也と望美の世話焼きハングル」を加筆修正し、さらに新たな書き下ろしを加えたものです。

最初この企画について NHK から話をいただいて、どうしたら「見知らぬ韓国人にいきなり話しかける」自然な会話ができるか悩みましたが、朔也と望美という若いカップルを登場させることで、相手の年齢や性別を問わず気軽に話しかける場面設定が可能になりました。さらに NHK の方から、話の最後にオチをつけてほしいという依頼があり、さすがにこれには困りましたが、なんとか頭をひねってクスッと笑いがもれるような展開をいくつか作れたおかげで、最後まで飽きずに学べる教材になったと思います。

韓国語は話し手と聞き手の上下関係などによって言葉遣いが変わる言語なので、話しかける相手もおばあさんから子供までいろいろな年齢層で、それぞれに対応した言葉遣いが学べるようにしました。場面も街中や駅、神社、城、渓谷などの観光地での案内、歌舞伎や相撲見物、飲食店、迷子、腹痛、自宅に招くなど、さまざまです。

また、「話す相手で選ぶおもてなしのフレーズ」というコーナーも設けました。これは、よく使う挨拶やフレーズについて、相手が目上か目下かによって使い分けられるように「丁重」「丁寧」「普通」「気楽」の四つの表現をまとめたものです。

さらに、初級学習者にとっても参考になるように、発音のツボ（発音変化のまとめ）、数詞や連体形の表、動詞・形容詞の変化表、助詞索引などもつけました。

音声 DL は NHK ハングル講座で活躍されているお二人が臨場感溢れる生き生きした会話を録音してくださいました。とても楽しく聴くことができるので、ぜひたくさん聴いて覚えていただけたらと思います。

文学部国文学科　教授　塩田今日子

編集後記

「季報」105 号をお届けします。

ご執筆いただきました諸先生にまず厚く御礼申し上げます。今号は、「私の夏休み」というテーマで原稿を依頼したところ、期せずして異国シリーズ第 3 弾のようなものになりました。異国情緒を味わっていただければと思います。

その他にも、いろいろお役に立つ記事などがございます。ぜひ手に取ってご一読ください。　（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第 105 号
発行日　2019 年 7 月 1 日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒 102-8336　東京都千代田区三番町 6-16
電話：03-3263-6364
柏図書館　〒 277-8585　千葉県柏市大井 2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333